

幼児期における人形を用いたふり遊びの理解の発達

大塚穂波

（神戸大学大学院 人間発達環境学研究科）

【目的】 子どものふりの理解には、ふりを行う文脈やそれを共有する他者の存在が影響していると考えられる。Friedman, Neary, and Leslie (2010) では、大人がふりをする際の声のトーンの違いを手がかりに、2歳児でも大人自身が要求しているのか「人形が要求している」ふりをしているのかを区別していることが示されたが、こうしたふりの理解に関する研究の多くは、実験を行う文脈を考慮していない（井上, 2011）。

そこで本研究では、Friedman et al. (2010) が明らかにした子どもの認知能力が、遊びという日常的な場面においても発揮されるかどうかを検討し、子どもがふりを理解するプロセスを明らかにする。

【方法】 参加児 1歳半児 12名（平均：21.5カ月）、2歳児 13名（平均：25.8カ月）、2歳半児 8名（平均：32.3カ月）

手順 本研究では、2つのセッションと自由遊びを一連の遊びの流れの中で行った。第1セッションはFriedman et al. (2010) Experiment 1の手続きを、日常の遊び場面に近くなるように一部変更した。具体的には①積木のほかに食べ物の形のおもちゃを用い、人形が持ってきたものとして提示する、②大人（人形）から子どもにおもちゃを要求する（「ちょうだい」）試行だけでなく、子どもにおもちゃを渡す（「どうぞ」）試行を加える、③おもちゃを直接的に受け渡しすることで、やりとりを双方向的かつ子どもが理解しやすいものにした。2種類の試行それぞれに大人が「人形がしゃべっている」ふりをしている場合（ふり条件）と大人自身が発話をする（現実条件）場合があり、それらを声のトーンの違いによって区別した。第2セッションは「人形が勝手に遊びを中断させる」という子どもにとって不測の出来事を提示した。

【結果・考察】 第1セッションでは、おもちゃを要求する（「ちょうだい」）試行において条件による差がみられ（ $F(1, 30)=52.99, p<.01$ ）、どの年齢の子どもも現実条件よりもふり条件で正しく反応した（Table 1）。これはFriedman et al. (2010) の結果と異なり、手続きを変更したことによる影響が示唆された。本研究では双方向的なやりとりや用いたおもちゃによって、ふりの文脈（井上, 2011）が成立しており、子どもはふり行為を産出しやすい状態にあったと考えられる。それにより、実験場面は「（大人が操作する）人形とやりとりを行う」ものとして理解され、大人は遊びを支える役割を担っていたのではないかと考えられる。このようにパターンのなやりとりによって反応することは、他者との相互作用を通してふりを理解していくための基盤となると考えられる。一方、子どもにおもちゃを渡す（「どうぞ」）試行では条件や年齢による有意な差はみられなかったが、この試行ではふり・現実両条件ともおもちゃを受け取れば正答となり、大人がふりをしているかどうかを区別する必要がなかったためであると考えられる（Table 2）。

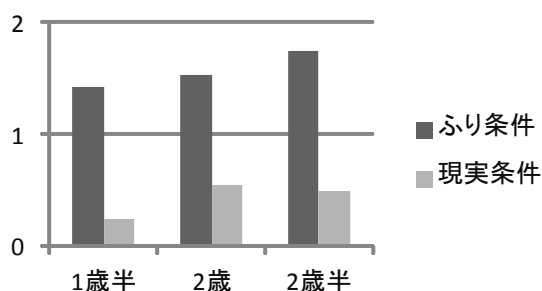


Figure 1. 「ちょうだい」試行の平均正答得点

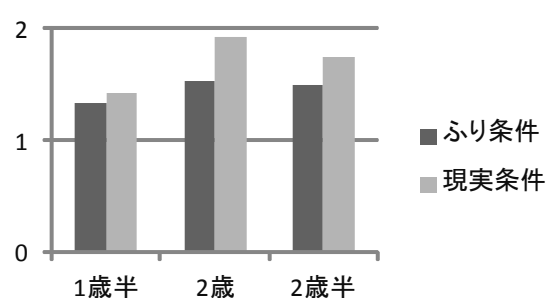


Figure 2. 「どうぞ」試行の平均正答得点

第2セッションについては明らかな反応を示した子どもが少なく、再検討が必要となった。原因として、第2セッションは、第1セッションのようなやりとりパターンを逸脱するものであり、2歳児には対応が困難であったことが考えられる。以上より、2歳児は大人が示したふりの文脈に支えられながらも、やりとりパターンに気づき、それにしたがうことでふり遊びを成立・持続させているといえ、この時期の子どもはふりの理解に関して、文脈の影響が示唆された。